

オスマン帝国における「王の祝祭」像の再構築に向けて

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 明治大学東洋史談話会 公開日: 2021-01-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 奥, 美穂子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/21404

オスマン帝国における「王の祝祭」像の再構築に向けて

奥 美穂子

I. 問題の所在

オスマン帝国（西暦 1300 頃-1922）には、「王の祝祭」（Sür-i Hümayûn）と呼ばれた王家主宰の華やかな祝祭が存在した。この「王の祝祭」は宗教儀礼や宮廷行事あるいはフォークロアの民衆の祭りとは区別されるものとして文献に登場し、スルタン⁽¹⁾の命によって執り行われた「国家行事」とも言うべき祝宴であった。王子・王女の誕生、王子の割礼や学問始め、皇女（スルタンの娘やスルタンの姉妹）の婚約・結婚といった王族関係者の通過儀礼の際、さらには外国使節の来訪、戦勝記念といった政治的な節目にも催され、建国から帝国末期まで、その形態や意味合いを変えつつも、時のスルタンによって数多く実施されてきた。中でも、1582年にムラト3世（在位 1574-1595）が主宰した王子メフメト（後のメフメト3世）の割礼を祝う祝祭（以下1582年祝祭）は、帝都イスタンブルを舞台に50余日に渡って帝国史上最大規模で行われた。この祝祭では王書執筆官（şâhnâmeci）による『祝祭の書』（sûmâme）が編纂され、写本に残る大量かつ良質のミニアチュールが当時の祝宴の様子を今に伝えている⁽²⁾。

オスマン帝国における「王の祝祭」に関する研究は、上に述べた『祝祭の書』、特にそのミニアチュールという画像史料を軸に展開した。1582年祝祭が主たる研究事例として扱われてきた理由は、他を凌駕する開催規模に加え、現存するミニアチュールが質量共に抜きん出ているからである。この祝祭に並んで研究対象とされることが多い1720年祝祭もまた、美しいミニアチュールに彩られた『祝祭の書』が残されている⁽³⁾。このような史料的性格により「王の祝祭」は美術史や演劇史、あるいは儀礼研究に蓄積のある文化人類学的視点から、主にトルコ人の研究者によって分析がなされてきた。トルコの文化史家メティン・アンドによる『40昼夜』（1959年）⁽⁴⁾を皮切りに着手された祝祭研究は、諸技芸的催し物の紹介やその文化的起源の探究、あるいは「祭」という「非日常」に内在する諸効果の分析を論考の主たる軸としてきた。史料としての『祝祭の書』については、文献学的な分析⁽⁵⁾や文学作品としての研究⁽⁶⁾が少量ではあるが行われているものの、個別研究は極めて少ないと言わざるを得ない。そして、このような従来の祝祭研究に一貫して欠落している点は、「王の祝祭」がもつ「時代性」の考察にあると言える。オスマン朝史を通じて行われた祝祭に対して、その時代別の特徴を分析し比較するような研究、あるいは同時代の統治体制と関連付けた論考は見当たらず、「王の祝祭」はその時代における政治的あるいは社会的背景と切り離されて論じられてきた。端的に言えば「壮麗豪華なショーとしての祝祭」の姿が全面的に紹介されてきた、ということである。

本稿は1582年祝祭を中心に、オスマン帝国における祝祭像の再構築のための予備的考察としてまとめたものであり、歴史学的視点からの「王の祝祭」研究の可能性について問題提起を行うものである。具体的には、

1582年祝祭の概略を確認した後、本稿前半において従来の祝祭研究に見られなかった社会的背景との関連に注目し、「王の祝祭」が持つ「時代性」を探る。後半部では、オスマン帝国史研究における「王の祝祭」の位置づけを行うため、王権儀礼研究との関係に着目し、新たな研究視点を検討することとする。また、文中では佐藤次高の論稿に依拠して⁽⁷⁾、スルタンを君主としての「王」、その権威・権限を「王権」と考え、考察を進めていく。

II. 1582年祝祭の概略と特徴

事例対象となる1582年祝祭の詳細を述べることは、本稿の趣旨から外れてしまうため、本章では概略に留める。オスマン帝国における「王の祝祭」の考察および1582年祝祭のプログラム分析については拙稿（2006年）を参照されたい⁽⁸⁾。また詳しい研究史および史料解題についても同様とする。

王子メフメトの割礼祭はヒジュラ暦990年Cemâziyelevvel月10日（1582年6月2日）に、スルタンと王子が祝祭会場となるイスタンブールの中心広場アト・メイダヌに入場することで幕を開けた⁽⁹⁾。これに先立ち、宮廷のハレムでは8日間かけてメフメトのための儀式が行われ、この期間に王妃他、帝国内で地位のある女性たちが、王子メフメトに贈り物を贈呈した。祝祭が一ヶ月近く続けられた後、Cemâziyelâhr月18日（7月10日）にスルタンから祝祭の更なる延長が告げられ、Cemâziyelâhr月29日（7月21日）にスルタンが宮廷に戻ることで一応の終結となる。このような日程は史料によって書き残されている日数やその記述方法が異なっていることもあり、祝祭が何日間行われたのかということについての具体的な数字の提示には慎重にならざるを得ない。しかし、ハレムでの儀式を含め、スルタンがアト・メイダヌから宮廷へ引き上げたところまでの日数を概算すると、およそ50日間ということになる。オスマン朝において開催期間が判明する祝祭は少なく、さらにその多くが3日から1、2週間程度の規模であることを考えると、1582年祝祭の開催期間がいかに突出したものであるかがわかる。

期間中の主な催し物には次のようなものがある。同業組合や見世物集団による山車行進は毎日のように行われ、祝祭の随所で民衆への食事や衣服の振る舞い、金銀のばら撒き、囚人の解放や借金の帳消し、といったスルタンによる施しがなされた。王子の割礼にあやかった子どもたちの集団割礼の実施や、非ムスリムのための簡易改宗会場の設置、高位のウラマーたちによる行進やコーランの暗誦会が催されるなどイスラームの優位性も示された。また、ムスリムに限らず、キリスト教徒やユダヤ教徒による様々な技芸が人々を楽しませた。軍が担い手となった模擬戦争や馬上弓槍競技も披露され、夜には花火が打ち上げられた。このような催し物が開催期間中途切れることなく毎日続けられた。さらに、この祝祭は帝国臣民に留まらず、諸外国に開かれた対外的なイベントでもあった。当時オスマン帝国と政治的な関係を持っていた国々に招待状が送られ、イスラーム諸地域だけではなく、西洋諸国からも多くの使節が来訪した。フランス人旅行者やフッガー一家やイングランドの特派員などによっても1582年祝祭の様子が記録されており、ヨーロッパ諸国の関心の高さを物語っている。

以上、催し物の性質や観客層からもわかるように、この祝祭は上層階級だけが参加し宮廷の中で完結したも

のではなかった。会場は宮廷外の広場に設定され、民衆の参加も随所に見られた。広場前には観覧用の棧敷や天幕が用意され、スルタンや招待客は期間中、そこに滞在する。すなわち、王室と民衆がひとつの場を共有して行われた公開型スペクタクルであったと評することもできよう。この公開性の高さという点は、1582年祝祭を特徴づける重要な要素のひとつとして今後考察されるべきものである。

III. 祝祭と時代性—1582年祝祭の社会的背景

前章で述べたように、1582年祝祭は多くの人を取り込みながら盛大に実施された。しかし、この背景となる「16世紀末」という時代は、華やかな祝祭のイメージとは裏腹に、600余年に渡るオスマン朝史において決して平穏な時代であったとは言えない。むしろ、スレイマン1世期（在位1520-66）という輝かしい時代を終えた後の「転換期」と位置づけられるほど、内外における政治的・社会的難局によって帝国そのもののシステムが変容し始めた時期であった。このような多難かつ不安定な時期に時の為政者は、なぜ、膨大な出費と時間、および人員を費やす祝祭を執り行ったのか、そして祝祭の開催は誰に何をもたらしたのだろうか。本章では祝祭が行われた当時の社会的背景を考察することで、1582年祝祭の「時代性」を探る糸口としたい。

1) 不安定な内政

後に最盛期と讃えられた16世紀半ばを過ぎると、オスマン帝国の統治形態は大きく変容していく。スルタンの主導的地位は低下し、官僚が政局を運営する時代が到来する⁽¹⁰⁾。セリム2世（在位1566-1574）を経て、ムラト3世期になると、スルタンは政治を放棄して宮殿に引きこもり、享樂的な生活を送った。戦場に赴くことも拒否し、在位初期には行っていた金曜礼拝⁽¹¹⁾も宮廷の中で済ますようになったという⁽¹²⁾。この傾向に比例して、実際の統治に影響力を増した宰相たち間の権力闘争は激化し、派閥闘争や賄賂の横行、不当な世襲など政治腐敗が進んだ。このような内政の転機となったのは1579年に起こった大宰相ソコルル・メフメト・パシヤの暗殺である。彼はスレイマン1世の晩年に当たる1565年より大宰相職を任されていた重鎮であり、帝国最盛期後の政局の舵取りをしてきた人物であった。しかし、権力闘争が激化する中で次第に政敵を増やし、結局、命を落とすこととなる。それまで大宰相の在職期間は比較的長期であったが、これ以後大宰相就任者はめまぐるしく変化し、罷免、再任といった短期政権の繰り返しとなった。

1582年祝祭を担当した大宰相スイナン・パシヤも、約16年間の間に計5回大宰相職に就任した人物であり、このことが既に政局の不安定さを物語っている。1582年祝祭の期間中には、スイナン・パシヤと、後にイラン遠征で活躍した大宰相となるフェルハド・パシヤ（当時イエニチェリ長官）との衝突があり、後の両者の権力闘争の発端となったとして、年代記等にも事の顛末が記録されている⁽¹³⁾。

2) 対外戦役

1582年祝祭は「安寧な世」を象徴するものではなく、隣国のサファヴィー朝（1501-1736）との抗争の只中に行われた戦時中の行事であった。サファヴィー朝との対立は東部地域の領土問題として、16世紀初頭から

抗争が絶えず、常に為政者の懸案事項となっていた。1555年のアマスィヤ条約の和平締結によって、一時的な平穏期をむかえるが、1578年にサファヴィー朝の内乱を機に、オスマン側がアゼルバイジャンに侵攻し、再び断続的な戦争状態に突入する。一進一退の攻防が進展を見せるのは1583年に総司令官に任命されたフェルハド・パシャの活躍以後であり、85年にタブリーズを占領、ようやく1590年になって12年ぶりの和約締結にこぎつける⁽⁴⁴⁾。この長い消耗戦のなかで、1582年は戦局打開の直前の時期にあたる。極限に向かうフラストレーションと首都で開催された大祝宴との相関関係は今後検討するに値する。

3) 経済的混乱期

上述のような情勢に加え、経済面においても大きな変動のうねりがオスマン帝国社会に押し寄せていた。16世紀後半は度重なる貨幣改鋳によって生じたインフレーションの影響により、特に1580年代の中盤から急速に国内の物価が上昇した経済危機の時代として知られている⁽⁴⁵⁾。

その主な要因は研究史上、一般に以下のようなものとされている。外的要因としては、ヨーロッパにおける「価格革命」の余波が挙げられる。アメリカ大陸からヨーロッパへの大量の銀の流入は地中海貿易を通じてオスマン帝国社会へも大きく影響し、銀の価値は急落した。対応を迫られたオスマン政府は銀の含有量を減らすべく貨幣改鋳を繰り返したが、これがインフレーションを引き起こし、16世紀を通じて価格水準は6倍にも達した。内的要因としては、国内の人口増加による食料不足に加え、正規兵の拡大による俸給の増加、長引く消耗戦による戦費増大による国庫の圧迫などが重なり、まさに負のスパイラルが引き起こされていた。この経済危機の要因については、16世紀における寒冷化という気候変動による影響についても注目され始めるなど、現在も新たな解釈が提示されている部分であるが⁽⁴⁶⁾、この世界的な経済システムの変動はオスマン帝国社会の内的ダイナミズムとあいまって、大きな時代の節目を生み出したのであった。

ムラト3世期はまさにこのような変動の只中であつた。即位直後から繰り返された貨幣改鋳の結果、1584年における銀貨の貨幣価値は1566年のそれに比べて半減してしまつた⁽⁴⁷⁾。そして、オスマン帝国経済史における転換点とも位置づけられるこの経済危機の渦中に、1582年祝祭は「盛大かつ華やか」に執り行われたのであつた。

4) 「政策」としての祝祭

16世紀末の社会情勢と照らし合わせてみると、1582年祝祭は社会的余裕から生み出された豊かさと安定が具現化したもの、と言い表すことは難しい。それでは1582年祝祭の開催には、どのような意図があつたのであろうか。1582年祝祭が行われた要因を、いくつか仮説を立てて考察してみたい。

① ムラト3世の享樂的かつ浪費家としての性格

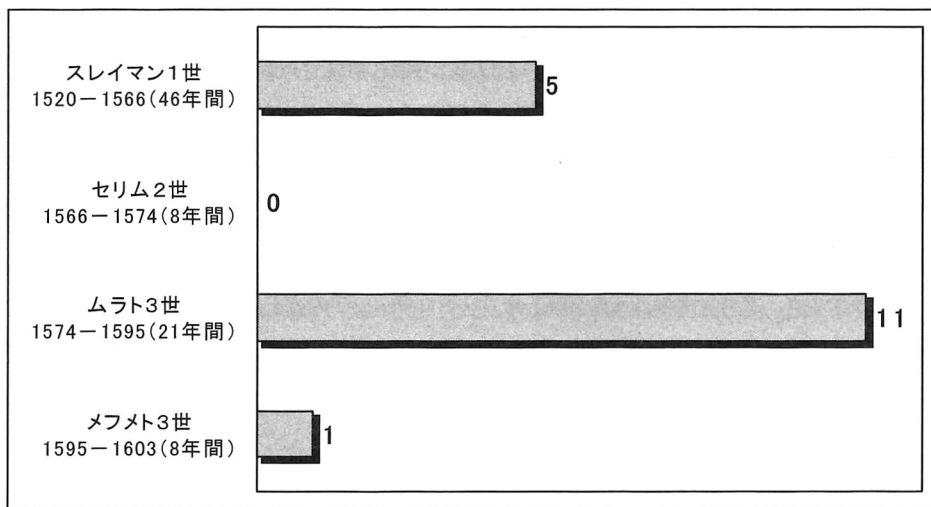
スルタン個人の性格がどこまで政局に反映されたのか、今すぐここで実証することはできない。しかし、諸文献に散見される記述から判断すると、彼は「派手なお祭り騒ぎ」は嫌いではなかつたようである⁽⁴⁸⁾。むしろ

散財することに抵抗感がなく、詩や文学を好んだと言われるムラト3世が、大規模な祝祭開催に対して好意的であったと推測することは容易である。加えて、息子メフメトに対する異常な寵愛ぶりも大きな後押しの一つとなった⁽¹⁹⁾。また、開催を告げる勅令は早くも1年前にあたるヒジュラ暦989年 Cemâziyelevvel 月1日(1581年6月3日)付けで、2種類の文面によって州軍政官(ベイレルベイ)をはじめとする全国計248人もの役人に送付されている⁽²⁰⁾。このように史料の面からもムラト3世が祝祭の開催に力を入れていたことを窺い知ることができる。

② 政治や戦局に無関心であったムラト3世が「王」としての権威を示すために用いた一手段

上記の①とも関連するところだが、ただお祭り騒ぎが好きであった、というところに留まらず、それを自分の権威の表象として利用した、あるいはそれを意識して大々的に祝祭を開催した、と踏み込んで考えることもできる。それまでのスルタンが「戦う王」として軍の頂点で君臨していたのに対し、金銀のばら撒きや囚人解放といった「富と恩恵」を誇示することで、自身の存在を正当化させようとしたのではないだろうか。政局の主導権が官僚層へ移行する中で、自己顕示欲が強かったと評されるムラト3世が⁽²¹⁾、自らの権威を世に知らしめるために祝祭を利用したと判断することも可能である。また、現段階で明らかにされている「王の祝祭」のうち、16世紀に開催された「王の祝祭」はムラト3世の時代に集中している(表1)⁽²²⁾。このデータについての詳細な検討は稿を改めて行うこととするが、ムラト3世と「王の祝祭」の関係は統計面からも問うべきものがあることが示されている。

表1：16世紀における「王の祝祭」の治世別開催数



③ 厳しい社会状況からの逃避あるいは民衆の目をそらすための政策

政策としての「祝祭」は、現代の世においてもその有効性を失っていない。さらには祭に内在される「非日

常の提供」は、現実が厳しいほどそのインパクトは大きいように思われる⁽²³⁾。不平不満の悶々としたエネルギーをプラス方向に消化させることによって、社会をよりコントロールしやすいものにするのは、為政者の手腕を問われるところである。「王の祝祭」の、特に通過儀礼に関するものは実施の時期をある程度コントロールできるため⁽²⁴⁾、最も効果的な時期に開催をぶつけることもできたと推測することができる。

以上、解答はどれかひとつということではなく、これらの要素が内包され相互に影響しあうことで1582年祝祭が生み出されたと考えるほうが理に適っている。また、逆の発想からすれば、政治的・社会的な危機にもかかわらず為政者の威光は保たれ、50日以上の祝祭が首都で開催できる社会、あるいは国家システムが揺らぐことはなかった、と考えることもできる。

このように、当時の社会情勢と関連させて「王の祝祭」を考察した研究は、従来の祝祭研究には、少なくとも1582年祝祭に関しては見られない。仮に王権表象の一形態、あるいは一つの政策として「王の祝祭」を捉えた場合、1582年祝祭が持つ政治的意味を検証することは、16世紀末のオスマン帝国像、あるいは「王」としてのスルタンのあり方を見直す一つの考察材料になると考える。次章では、オスマン帝国における王権儀礼研究の導入として、その研究動向と問題点を整理する。

IV. 「王の祝祭」と王権儀礼研究

「祝祭」を王権表象の一策として捉え、それを王権儀礼研究の中に位置づける試みは、他地域では既に行われてきたものである。本章でも1582年祝祭前後を時代軸として設定し、考察を進めることとする。

1) 同時代のヨーロッパ世界における王権儀礼研究

まず重要となるのは、同時代のヨーロッパ世界における王権儀礼研究である。祝祭の政治的意義を問う研究はヨーロッパ史の分野においては蓄積も多く、成熟した研究ジャンルとして確立している⁽²⁵⁾。即位式、入市式（王侯の都市訪問）、宮廷祝祭、野外劇（ページェント）、馬上槍競技、宮廷バレエといった諸事例を挙げ、その象徴機能を読み解く手法は、他地域の研究にも応用できるものとする。フランス史家である二宮宏之がその著作において、王権儀礼を通して表象された「権威」こそが、王の「権力」の行使を可能にしていたと述べるように⁽²⁶⁾、マルク・ブロックの『王の奇跡』やカントロヴィッチの『王の二つの身体』を基軸として発展したヨーロッパ王権儀礼研究は、単なる儀礼の再現に留まらず、そこに内在する王の権威表象、さらには背後にある国家体制のあり方を分析の対象としている。そしてこれらの研究に一貫したキーワードは以下の4点に集約できる。

- ① 圧倒的な統治力、経済力を目に見える形で提示
- ② 王を讃える演出装置としての祝祭
- ③ 非日常の現出、チャリティー的性格
- ④ 権力を可視化し、統治者や政治体制を正当化

これらの要素は 1582 年祝祭の特徴に当てはまるものばかりである。しかし、ヨーロッパの王権儀礼との間に多くの共通点が見られるにもかかわらず、文化史的枠組みの中に閉じ込められたオスマン帝国の祝祭研究においては、「王の祝祭」を「王権儀礼研究」という側面で捉える視点はこれまで存在しなかった。また同様にヨーロッパ史の研究においても、オスマン帝国の祝祭に関する言及は全く見られない。これは西洋史研究と東洋史研究との間にある断絶を如実に示すものであり、両者の政治文化が全く別のものとして把握されてきたことによる。しかしながら、当時の緊密な政治関係や地理的連続性に加えて、オスマン帝国の中央集権体制とヨーロッパにおける絶対主義体制という、共に強力な権力機構を伴っている点での政体の類似性などを考慮すれば、祝祭の形態や手法、その政治的有効性などについて、両者が互いの「祝祭行為」を意識しあっていた可能性は充分にあると言える⁽⁷⁾。そしてこの点こそが、オスマン帝国における祝祭研究を行う上で同時代ヨーロッパ地域のそれを比較すべき対象としうると考える所以である。祝祭を含む王権儀礼研究は、日本や中国、イスラーム世界など、既に各地域を対象に行われている。さらにその枠組みは歴史学に留まらず、民俗学、人類学、社会学と、研究の切り口も幅広い。本稿でそのすべてを網羅し、比較検討することは筆者自身の力量を超える。しかしその一端として、同時代の地中海世界を共有する西洋世界との連続性の中でオスマン帝国を捉えていく視点に立ち、1582 年祝祭を中心に「王の祝祭」像の再構築を進めることが、筆者の問題関心であり課題となることを再度強調しておきたい。

2) オスマン帝国における王権儀礼研究

本節では、「王の祝祭」がオスマン帝国の宮廷儀礼や祝祭を扱った研究の中で、どのように位置づけられているのかについての考察を行う。

まず「王の祝祭」の記述内容や視点の切り口については、本稿の冒頭で述べた従来の研究動向を踏襲しているものが多く、現在も「王の祝祭」に対する新しい解釈は現れていない。例えば、2000 年にスライヤー・ファローキーによって発表されたオスマン朝の文化と日常生活に関する研究では⁽⁸⁾、通史的に概観された文化史・社会史的内容のなかに、都市の文化や女性の生活等と並んで、1720 年祝祭の様子がミニアチュールと共に紹介されている。このような方法は、いわゆる祝祭を文化史の中のみ位置づける典型的な扱いであると言える。2004 年にはデュンダル・アリークルチがオスマン帝国の儀礼全体について概括的整理を行っている⁽⁹⁾。この研究における「王の祝祭」についての記述をみると、祝祭の契機や祝祭行為が生み出す「非日常的な空間」が与える社会への影響、豊穡を象徴するオブジェであるナフル (Nahl) の解説はなされているが、権力構造との関係や時代の変遷に伴う変化についての言及は見られない。これは依然として、前述したアンドによる研究の影響力の強さを同わせるものである⁽¹⁰⁾。

オスマン帝国の宮廷組織や宮廷儀礼の研究分野では、「王の祝祭」の枠組みが重要視されていないことがわかる。ウズンチャルシュルによる宮廷組織に関する研究（初版 1945 年）では、スルタンに関わる諸儀礼をまとめた項目が立てられている⁽¹¹⁾。しかし即位式やバイラム（イスラームの祭り）を祝う行列などが言及される中で、「王の祝祭」の文字は登場しない。つまり、割礼や学問始めといった通過儀礼、そしてそれに伴って

催された「王の祝祭」が、宮廷儀礼とは別のものとして把握されていることになる⁽³²⁾。逆に、トプカプ宮殿の建築構造を軸に、それぞれの空間に配備された役職やそこでの慣習等を扱ったギュルル・ネジブオウルによる『建築、儀礼、権力：15・16世紀におけるトプカプ宮殿』（1990年）⁽³³⁾では、宮廷儀礼の項においてスルタンによる金曜礼拝の行列や戦勝記念行進、外国使節を迎えるの見世物の披露、およびパイラムが図像史料と共に紹介されている。戦勝記念行進と外国使節のための祝宴は、「王の祝祭」に分類されるべきものであるにもかかわらず、ネジブオウルにとっては、すべてが宮廷儀礼（あるいは宮廷行事）の範疇にあり、ここでも「王の祝祭」という枠組みに対する認識は薄いと云わざるを得ない。

これまでの問題点を整理すると、まず研究対象として「儀礼」を扱うときに、各研究者によってその分類の仕方が非常に曖昧であることが指摘できる。そして、「王の祝祭」という枠組みがオスマン帝国の儀礼研究において特に強調されるべきものとして扱われてこなかった。これは文化史や演劇史を中心とする「王の祝祭」の研究者と、政治や権力構造を対象とする研究者との間で、問題認識が共有されてこなかったことに起因するのではないだろうか。また両者共に、どのような儀式や祝祭があったのかという関心に止まってしまい、それらの行為がなぜ必要であったのかという議論を展開してこなかったこともこの問題の根底にあるように思われる。

しかし、オスマン帝国史研究においても新たな切り口による問題提起が登場してきた。2005年に『秩序の正当化：オスマン帝国における国家権力の修辞学』というタイトルで刊行された論文集⁽³⁴⁾は、オスマン帝国における権力表象に着目したものとして斬新である。オスマン家というひとつの王朝が600年以上統治を続けるために、その正当性をどのように社会に認めさせ、統治権を維持してきたのか、ということがテーマとして設定されている。この論集の中にはムラト3世の王権と史書編纂についての関係を考察した論稿も収録されており⁽³⁵⁾、王権表象の問題をどのように考えるかという点において大変興味深いものとなっている。

近代史分野においても、権力と国家行事との関係に着目した研究が注目されている⁽³⁶⁾。セリム・デリンギルの『加護された領土：オスマン帝国におけるイデオロギーと権力の正当化（1876-1909）』（1997年）⁽³⁷⁾では、スルタンの威光を投影した様々な行為・政策が、王権あるいは国家そのものを正当化させるために利用されたことが主題のひとつとして論じられている。スルタンの金曜礼拝の行列の変容についての言及もあり、これについて秋葉淳は日本を含む王室儀礼との共通性を見出し、儀礼の国際的競争の一環として理解されるものだと指摘している⁽³⁸⁾。また、ナーディル・オズベクも『オスマン帝国における社会国家：政治、権力、正統性（1876-1914）』（2002年）⁽³⁹⁾の中で、帝国が主催した集団割礼等を例に挙げながら政治権力と社会的慈善行為との関係を考察している。

ここで両者が扱う諸事例はアブデュルハミト2世期（在位 1876-1909）を対象としており、近代史における問題意識に基づいて論じられたものであることは言うまでもない。そのため、単純に「王権表象論」としてまとめてしまうことは半ば強引であり、「王」や「権力」、「帝国」といった概念に内在する意味が16世紀のそれとは異なるという点にも留意せねばならない。しかし「儀礼」あるいは「王が与える恩恵」という点で注目した場合、イスラーム主義的専制君主として知られるアブデュルハミト2世の王権表象に着目した研究の一環と

して位置づけることも可能であろう。この研究動向については、林佳世子による『オスマン帝国 500 年の平和』(2008 年)においても、「(アブデュルハミト 2 世の) こうしたイスラム的な主張は、しばしば復古的、反動的なものとみられてきたが、実際には、ヨーロッパの諸王家から日本の天皇家に至るまで、近代の諸王権が使った宗教的な『演出』のオスマン版といえるものだった。」と言及されている⁶⁰⁾。

このように近代において「儀礼と政治」の関係性が論じられるならば、それは近代のオスマン帝国社会に突然生まれ出たものではなく、それ以前の社会から受け継がれた要素があると考えられることも可能であり、1582 年祝祭が行われた 16 世紀にも同じ視点が適応できるはずである。近世ヨーロッパ史との関連と同様、儀式や祝祭が権力とどのような関係にあったのか、近代オスマン帝国史との連続性についても議論を深めたいところである。

3) 枠組みの再構築に向けて

改めて宮廷行事やその他の王権儀礼も含めて「オスマン帝国における祝祭研究」という問題設定枠を再考してみると、単に「王の祝祭」のみが「祝祭」なのではなく、スルタンによる金曜礼拝の行列やパイラムもまた、王権を表象する儀礼的祝祭として再度その位置づけをしなおす必要があることがわかる。また、当時の認識において「王の祝祭」と区別されていたスルタンの即位式や葬儀についても、どのような思想的背景に基づいてこのような行事区分がなされたのか、依然明解な答えは出されていない。さらに検討の枠を広げるならば、同様にスルタンが保護を与えたメッカ巡礼にも、王権儀礼的要素を見出すことができる。そのためにも、オスマン帝国における祝祭研究を行う上で「宮廷儀礼」や「王権儀礼」の枠組みと「王の祝祭」の研究とを分離せず、ひとつの枠組みのなかに位置づけ、相互の関連を分析していく必要があるという点を、小結として強調しておきたい(表 2)。これは儀礼的祝祭が社会に与えた影響、権力側にとっての必要性、祝祭そのものの意義の分析を視座に据えた研究を展開する上で、基盤となるものになると考える。

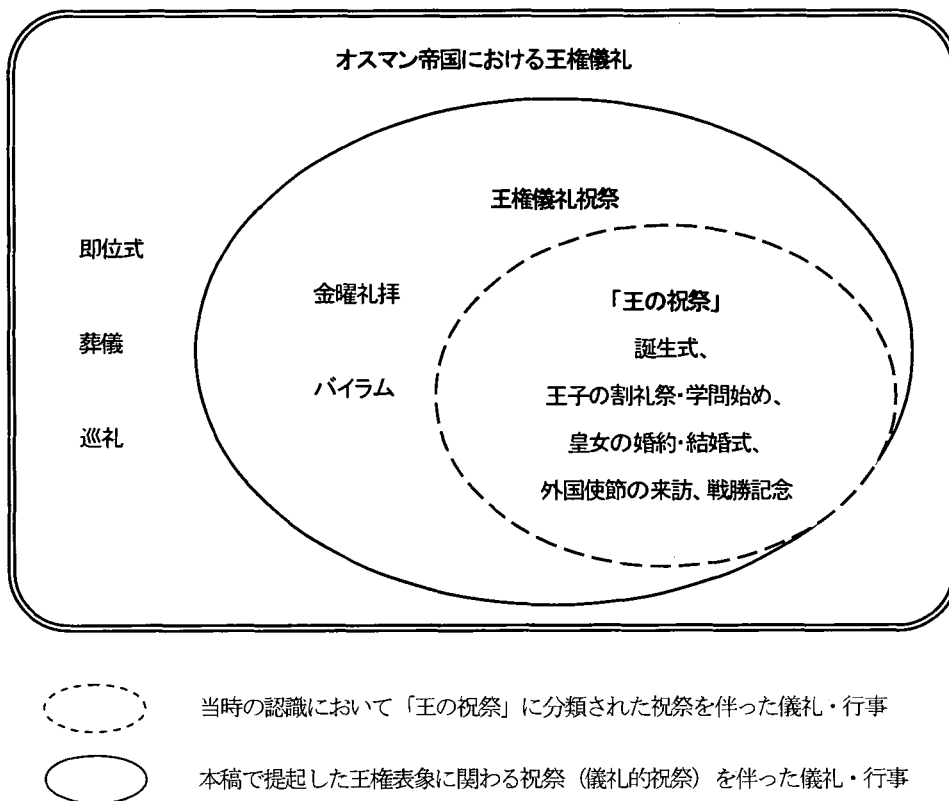
V. 今後の課題

研究の軸に据える 1582 年祝祭に内包される王権儀礼としての「普遍性」を追求すると同時に、オスマン帝国の「王の祝祭」において突出した規模で催された 1582 年祝祭の「独自性」もまた、再度史料的に裏付ける必要がある。そのためにも、これまでの祝祭研究に用いられなかった文書史料にアプローチしていくことが課題となる。まず、先に言及した枢機勅令簿(Mühimme Defteri)に見られるスルタンの勅令文書が挙げられる。祝祭開催の一年前から各地に通達された勅令には、祝祭に必要な物資の調達、当日技芸を披露するための訓練を命じたものなど、どのような人員、物流の下で祝祭が整えられていったのかが具体的に記されている。現在この史料分析を行っているところであるが、今まで明らかにされてこなかった祝祭の前後の動きにアクセスできる点で有効な史料であると考えている。そして未入手史料ではあるが、祝祭期間中に振舞われた祝宴に関する支出帳簿(Masraf Defteri)や、招待客や高官によってもたらされた贈呈品に関する記録も、トプカプ宮殿博物館附属文書館に保管されているようである⁶¹⁾。これについても、これまでのどの祝祭研究者も予算や

出費についての情報は年代記の限られた記述に頼ってきただけに、新たな情報を提供することになるであろう。ここに挙げたような文書史料群を駆使することで1582年祝祭の新たな側面を、より厳密に実証することができると考えている。

オスマン帝国史研究の進展は近年目覚しく、従来の帝国像に対する新解釈が続々と登場している。しかし、一般レベルでは依然として「粗野な軍事大国」としてのイメージが強く、一方で華やかな文化は当時の政治と切り離された場所で語られることが多い。このような現状に対し、オスマン帝国における「王の祝祭」の実態を改めて分析しなおすことは、文化現象と当時の社会情勢とを繋げるひとつの架け橋となるであろう。単に祝祭のプログラムを再現するだけでなく、本稿において提起したような歴史学的見地からの史料実証、そして政治と文化との交錯点にある王権儀礼分析の視座に立つことで、新たな「王の祝祭」像を従来とは違った視点から再構築していくことを筆者自身の今後の課題としたい。

表2：オスマン帝国における王権儀礼の枠組み



註

- (1) 高松洋一によっても指摘されるように、実際のトルコ語においてオスマン朝の君主を指す語は「パデーイシャー」(pâdişah)であり、古文書においてもこの言葉が用いられている。(高松洋一「オスマン朝の文書・帳簿と官僚機構」林佳世子、梶屋友子(編)『記録と表象 史料が語るイスラーム世界』東京大学出版会、2005、p.195。)しかし本稿においては、現時点で一般に用いられている「スルタン」の語をオスマン朝の君主の称号として用いることとするが、今後検討が重ねられるべき点であることを付記しておく。
- (2) 1582年祝祭以前には、『祝祭の書』の存在が確認されておらず、この祝祭で初めて本格的な『祝祭の書』が書かれた可能性が高い。
- (3) アフメト3世によって15日間にわたって催された4人の王子たちの割礼祭。1720年祝祭の記録としては『ヴェフビの祝祭の書』(Sûmârme-i Vehbî)と呼ばれる『祝祭の書』があり、写本も複数存在する。
- (4) M. And, *40gün 40gece*, İstanbul, 1959.
- (5) 例えば G. P. Eisl, *Das Surname-i Humayun: die Wiener Handschrift in Transkription, mit Kommentar und Indices versehen*, İstanbul, 1994.
- (6) 例えば M. Arslan, *Türk Edebiyatında Manzum Surnameler: Osmanlı Sarayı Düğünleri ve Şenlikleri*, Ankara, 1999.
- (7) 佐藤次高『イスラームの国家と王権』岩波書店、2004、pp.9-12.
- (8) 拙稿「オスマン帝国における祝祭の社会的考察—王家主催の1582年祝祭を中心に」『駿台史学』129, 2006, pp.83-104.
- (9) 以下、1582年祝祭の概要については以下の史料に拠る。Photocopy of OSU Theatre Collection Film 1623 : Lokman ibn Huseyn Al-'ashuri III Murat Sumamesi. (本文原稿は *Surname-i Humayun Wien Erhandschrift* : Wien, Österreichische Nationalbibliothek, cod.H.O.70 (flügel 1019).) ; *Calendar of State Papers, Foreign Series, of The Reign of Elizabeth, May-December 1582. preserved in the Public Record Office, Edited by Arthur John Butler, M.A.*, London, 1909.; *The Fugger news-letter ; being a selection of unpublished letters from the correspondents of the house of Fugger during the years 1568-1605* / ed. by Victor Von Klarwill ; authorized tr. by Pauline de Chary Foreword by H. Gordon Selfridge / With Thirty Illustrations, London, 1924.; Mustafâ Selânîki, *Târih-i Selânîki: Die Chronik des Selânîki*, (ed.) Klaus Schwarz, Verlag reiburg, 1970.; Peçevî İbrahim Efendi, *Tarih-i Peçevî*, (ed.) Önsöz ve İndeks Fahei Ç Derin-Vahit Çabuk, İstanbul, 1980.; Hasan Bey-zâde Ahmed Paşa, *Hasan Bey-zâde Târîhi*, (ed.) Hurlayan; Şevki Nezih Aykut, Ankara, Cilt. II, 2004.
- (10) この社会変容については、林佳世子『オスマン帝国500年の平和』(興亡の世界史10), 講談社, 2008年に近年の研究動向が反映されており、分かりやすく論じられている。
- (11) 金曜の集団礼拝のときに、スルタンが宮廷外のモスクに行列を率いて出向くという慣習。
- (12) İ. H. Uzunçarşılı, *Osmanlı Tarihi*, III-1, Ankara, 1947, p.114.
- (13) 特に『ハサンベイヤデーデ史』に詳細な記述がある (Hasan Bey-zâde Ahmed Paşa, *Hasan Bey-zâde Târîhi*, (ed.) Hurlayan; Şevki Nezih Aykut, Ankara, Cilt. II, 2004. pp.288-297.)。また、『祝祭の書』のトップ写本のミニ

- アチュール (ST 写本 424-a) にも、この事件の様子が描かれている (Lokman Bin Hüseyin Al-'ashuri, *III. Murat Surnamesi*, İstanbul, ca. 1583, Topkapı Sarayı Kitaplığı, No.703 H.1344.)。
- (14) この時オスマン側は領土も拡大するが、17 世紀に入るとすぐにサファヴィー朝が攻勢に転じ、結局は 1607 年までに 1555 年の境界ラインまで後退してしまう。その他、バルカン半島を舞台とした西部方面の抗争にしても、対オーストリア情勢が常に緊張状態 (1582 年は停戦中) にあり、この時期の対外関係は各方面において予断を許さない情勢であったと言える。
- (15) Ş. Pamuk, *A Monetary History of the Ottoman Empire*, Cambridge, 2000, pp.113-158.
- (16) 林, 2008, p.210.
- (17) Ö. L. Barkan, The Price Revolution of the Sixteenth Century: A Turning Point in the Economic History of the Near East, (trans. Justin McCarthy), *International Journal of Middle East Studies* 6, 1975, p.12.
- (18) 例えば, M.Süreyya, *Sicill-i 'Osmânî*, Vol.1, Farnborough, 1971, pp.76-77 や G.Eren(ed.), *Osmanlı*, Vol.12, Ankara, 1999, pp.128-131 の各「ムラト 3 世」の項においても、その性が伺える。
- (19) *İslam Ansiklopedisi* (Vol.7, 1972, p.536.) の「メフメト 3 世」の項において, M.T.Gökbilgin は、ムラト 3 世の息子に対する異常な寵愛が、豪勢な 1582 年祝祭を生み出したと説明している。
- (20) Başbakanlık Osmanlı Arşivi, *Mühimme Defteri* 42 no.164,165.
- (21) 例えば, İ.H.Uzunçarşılı, *Osmanlı Tarihi*, III-1, 1947, p.44.
- (22) 表 1 は以下の文献を参照の上、筆者が作成した。今後の検討により数字が前後する可能性もあるが、ムラト 3 世期の特徴を示すものとして有効である。M. And, 1959, pp.28-45.; Id., Sur-ı Hümayun, *İstanbul Ansiklopedisi* Vol.7, İstanbul, 1994, pp.71-72.; M. Arslan, Osmanlı Saray Düğünleri ve Şenlikleri ve Bu Konuda Yazılan eserler:Sümâmeler, In *Osmanlı* Vol.9, G.Eren(ed.), pp.169-189, Ankara, 1999.; Id., *Türk Edebiyatında Marzum Surnameler: Osmanlı Saray Düğünleri ve Şenlikleri*, 1999, pp. 5-72.
- (23) 社会学の立場における「日常」と「非日常」の議論を、基本的な研究史を踏まえ整理したものとしては、嶋根克己「非日常を生み出す文化装置：日常と非日常の社会学にむけて」嶋根克己、藤村正之（編）『非日常を生み出す文化装置』北樹出版、2001、pp.16-37 が挙げられる。
- (24) 割礼について言えば、イスラーム社会において割礼を施す時期は、生後何日目あるいは何歳の時といったように、ある特定の年齢に限定されたものではない。このため各人において割礼の時期は異なることになる。割礼を祝われた王子メフメトはこの時ちょうど 16 歳になったところで、一般的にみるとかなり遅めの時期であると言える。
- (25) 本稿末尾にヨーロッパ史を中心とした王権儀礼に関する主要文献を掲載した。なおこのリストを作成するにあたり、東京外国語大学の西洋史研究会の皆様にご貴重なご助言を賜りました。ここに記して感謝申し上げます。
- (26) 二宮宏之 「王の儀礼」『フランス アンシアン・レジーム論』岩波書店、2007、p.278.
- (27) 祝祭の場におけるヨーロッパ諸国との交流としては、1524 年祝祭でヴェネツィア使節が宮殿でバレエ

- を披露した例などが挙げられる (M. And, 1959, p.44.; 永田雄三「コスモポリタンなイスラーム都市イスตันบูลの祝祭(16・17世紀)」明治大学人文科学研究所(編)『歴史のなかの民衆文化』風間書房, 1998, p.248.)。
- (28) S. Faroqhi, *Subjects of the Sultan: Culture and Daily Life in the Ottoman Empire from the Middle Ages until the Beginning of the Twentieth Century*, London, 2000.
- (29) D. Alikılıç, *İmparatorluk Seremoni: Osmanlı'da Devlet Protokolü ve Törenler*, İstanbul, 2004.
- (30) And, İstanbul, 1959; Id., *Osmanlı Şenliklerinde Türk Sanatları*, Ankara, 1982.
- (31) İ. H. Uzunçarşılı, *Osmanlı Devletinde Saray Teşkilâtı*, 3.baskı, Ankara, 1988, pp.184-229.
- (32) Es'at Efendi, *Teşrifât-ı Kadîme*, C.Baltacı(ed.), İstanbul, 1979 もオスマン帝国の儀礼を扱ったものだが、「王の祝祭」についての言及は見られない。
- (33) G Necipoglu, *Architecture, Ceremonial and Power: the Topkapı Palace in the Fifteenth and Sixteenth Centuries*, New York, 1990.
- (34) H. Karateke and M. Reinkowski (eds.), *Legitimizing the Order: the Ottoman Rhetoric of State Power*, Leiden and Boston, 2005.
- (35) C. Woodhead, *Murad III and the Historians: Representations of Ottoman Imperial Authority in Late 16th-Century Historiography*, In *Legitimizing the Order: the Ottoman Rhetoric of State Power*, H. Karateke and M. Reinkowski (eds.), pp.85-98, Leiden and Boston, 2005.
- (36) 秋葉淳はオスマン帝国近代史研究における 1990 年代以降の新しい視点について言及しており、オリエンタリズムに端を発する西洋基準の近代化論に対して、オスマン帝国側に変革のエージェント(行為主体)を見出そうとする潮流を紹介した。この論考の中に以下で言及するデリングルやオズベクの研究が紹介されている。(秋葉淳「近代帝国としてのオスマン帝国：近年の研究動向から」『歴史学研究』798, 2005-2, pp.22-30.)
- (37) S. Deringil, *The Well-Protected Domains: Ideology and the Legitimation of Power in the Ottoman Empire 1876-1909*, London, 1997.
- (38) 秋葉, 2005, p.23. 19 世紀末から 20 世紀初頭にかけての「儀礼競争」については、T. フジタニ(米山リサ訳), 『天皇のページェント』NHK ブックス, 1994, pp.89-93 を参照。
- (39) N. Özbek, *Osmanlı İmparatorluğu'nda Sosyal Devlet: Siyaset, İktidar ve Mesruiyet(1876-1914)*, İstanbul, 2002.
- (40) 林, 2008, p.361.
- (41) Topkapısarayı Arşivi, D.9715, D.10015. (典拠: *İslam Ansiklopedisi* Vol. 7, p.536.)

【王権儀礼研究に関する主要参考文献】

本稿で言及したヨーロッパ史における王権儀礼研究の軸となる問題視点と研究手法は、主に以下に挙げた文献によって論じられている。なお、紙面の都合上、基本となる主要文献かつ日本語で読めるものを中心に抜粋した。

Giesey, R.E. 1960 : *The royal funeral ceremony in Renaissance France*, Geneva.

————— 1987 : *The King Imagined*, Keith Michael Baker(ed.), *The French Revolution and the Creation of Modern Political Culture*, vol.1, Oxford, pp.41-59.

デュビニョー, J. (渡辺淳訳) 1973 : 『スペクタクルと社会：劇的想像力の社会的機能について』法政大学出版社。

エリアス, N. (波田節夫 他訳) 1981 : 『宮廷社会』法政大学出版社。

イエイツ, F. A. (西澤龍生, 正木晃訳) 1982 : 『星の処女神エリザベス女王：16世紀における帝国の主題』東海大学出版会。

————— (西澤龍生, 正木晃訳) 1983 : 『星の処女神とガリアのヘラクレス：16世紀における帝国の主題』東海大学出版会。

ストロング, R. (星和彦訳) 1987 : 『ルネサンスの祝祭：王権と祝祭 上・下』平凡社。

ギアツ, C. (梶原景昭 他訳) 1991 : 「中心, 王, カリスマ：権力を象徴するものについての考察」『ローカル・ノレッジ：解釈人類学論集』岩波書店, pp.211-255.

カントーロヴィチ, E. H. (小林公訳) 1992 : 『王の二つの身体：中世政治神学研究』平凡社。

シャルチエ, R. (松浦義弘訳) 1994 : 「王の非神聖視？」『フランス革命の文化的起源』岩波書店, pp.169-205.

フジタニ, T. (米山リサ訳) 1994 : 『天皇のページェント』NHK ブックス。

アポストリデス, J. M. (水林章訳) 1996 : 『機械としての王』みすず書房。

————— (矢橋透訳) 1997 : 『犠牲に供された君主：ルイ 14 世治世下の演劇と政治』平凡社。

ブロック, M. (井上泰男, 渡邊昌美訳) 1998 : 『王の奇跡』刀水書房。

ギンズブルグ, C. (竹山博英訳) 2001 : 「表象」『ピノッキオの眼：距離についての九つの省察』せりか書房, pp.124-152.

バーク, P. (石井三記訳) 2004 : 『ルイ 14 世：作られる太陽王』名古屋大学出版会。

二宮宏之 2007 : 「王の儀礼」『フランス アンシアン・レジーム論』岩波書店, pp.277-305. (初出「王の儀礼：フランス絶対王政」『シリーズ世界史への問い』7, 岩波書店, 1990.)

渡辺節夫 1998 : 「ヨーロッパにおける国王祭祀と聖性」水林彪, 金子修一, 渡辺節夫 (編) 『王権のコスモロジー』弘文堂, pp.259-281.

- 石井三記 2002 : 「ヨーロッパの王権儀礼 : フランス宮廷」『王権と儀礼』, 岩波講座 天皇と王権を考える 5,
岩波書店, pp.121-151.
- 多木浩二 2002 : 『天皇の肖像』岩波現代文庫.
- 今村真介 2004 : 『王権の修辭学 : フランス王の演出装置を読む』講談社選書メチエ.
- 小山啓子 2006 : 『フランス・ルネサンス王政と都市社会 : リヨンを中心として』九州大学出版会.